様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月　 ７ 日現在

機関番号：３７１１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０８８６

研究課題名（和文）戦間期ベルリンにおける＜共＞とクィアの交錯―M・ヒルシュフェルトを中心に

研究課題名（英文）The interplay of "the common" and queer in interwar Berlin: centering on M. Hirschfeld

研究代表者
星乃　治彦（Hoshino, Haruhiko）

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：００２１９１７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はクィアと人びとが集う共同性についての語り直しを図るものである。そうしたクィアと＜共＞の実践者として、20世紀前半ドイツ・ベルリンの性科学者マグヌス・ヒルシュフェルトおよび彼が1919年に創設した性科学研究所を考察の対象とした。クィアの黎明期であるヒルシュフェルトを考察の軸に据えることで、クィア史を女性史・ジェンダー史・男性史の蓄積と参照させつつ、史学史的な検証も行うことができた。

研究成果の概要（英文）：The present research project tried to re-examine the interplay of “ the common ” and queer by analyzing the activities and ideas of Magnus Hirschfeld, a German sexologist who was active in the first half of the 20th century, and the Institute for Sexual Science opened by him in 1919 in Berlin. By throwing light on his role at the dawn of queer, I could examine the historiography of women's/ men's/ gender history and connect them with queer history.

研究分野：クィア・ヒストリー

キーワード：クィア・ヒストリー　マグヌス・ヒルシュフェルト　性科学　戦間期　労働運動史　ヴァイマル共和国　性改革運動　ベルリン

１．研究開始当初の背景

本研究は、ジュディス・バトラーやイヴ・K・セジウィックが先鞭をつけたクィア理論を歴史研究のなかに位置づけ、クィア史の構築を目指すものである。研究代表者・星乃治彦は『男たちの帝国―ヴィルヘルム 2 世からナチスへ―』（岩波書店、2006 年）において、「ホモセクシュアル」が本質主義的に存在するのではなく、歴史的プロセスを経て「形成されてきた」という社会構築主義的観点を歴史研究に導入し、「ホモセクシュアル」がいかに形作られてきたのかをドイツ近現代史をフィールドに明らかにした。

そして、西洋史全体に応用することを試みるため、星乃は平成 20 年～22 年度の日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(C)「クィア・ヒストリーによる西洋史再考」に取組み、性愛の問題を人間観の関係性の問題へと発展させた。セクシュアリティのあり様を古代・中世・近世・近代・現代という時代の特質として抽出し、加えて、「家族」や「友情」といった様々な関係性や、公／私の区分の歴史性を明らかにした。こうした取組みは、ヘテロセクシュアルによって解釈されてきた歴史をクィアの観点から考察することにより、新たな歴史像の構築を目指すことが可能となった。

２．研究の目的

（１）＜共＞・ヒルシュフェルト・クィアの交錯

本研究は、上記の成果を踏まえ、公共圏議論の延長線上に登場したアントニオ・ネグリ、マイケル・ハートが提唱した＜共＞概念を、クィア史に接続させる試みである。星乃はすでに、「『構造』のなかにおける＜共＞の現場」『歴史学研究』（2013 年 10 月）において、歴史的実態としての＜共＞概念の方法的整理を行った。人びとの関係性の歴史をプレモダン＝「共同体」、モダン＝「個」、ポストモダン＝＜共＞に分けて分析し、史学史的な検証を試みた。また、『台頭するドイツ左翼―共同と自己変革の力で―』（かもがわ出版、2014 年）においては、人びとの＜共＞への着目を、冷戦後のドイツを対象に分析した。こうした視角と具体的な歴史的な過程を追うことで、本研究はクィアと人びとが集う共同性についての語り直しを図るものである。

そうしたクィアと＜共＞の実践者として、20 世紀前半ドイツ・ベルリンの性科学者マグヌス・ヒルシュフェルトおよび彼が 1919 年に創設した性科学研究所を考察の対象とした。

当該時期のベルリンは凝縮性の高い労働者世界＝Kietz が存在しており、性科学運動はモダン（解放運動）とポストモダン（クィア）が相互乗り入れをしていた。そうした状況のなかでヒルシュフェルトは、都市ベルリンにおける＜共＞の指導者＝社会主義者、クィアの先駆者として活動を行っていた。また、性科学研究所はマックス・ホダンなど、労働運動家・性科学者が多様な関心のもとに集っていた。例えば、同研究所は避妊や中絶といった産児制限の問題を、科学的立場から啓蒙活動を展開しており、とりわけホダンは多くの若者層から愛され、大衆的基盤を有していた。そのほか、堕胎を禁じた刑法 218 条に反対する運動にも積極的に関与し、社会民主党を中心とした労働運動との共同姿勢を強めた。ただし、人口学の影響から、健全な肉体・健全な国民といった規範も共有しており、そこには優生学の影が忍び寄っていた。こうした社会問題としての性は「ホモセクシュアル」をめぐる議論についても同様のことを指摘することができる。例えば、ヒルシュフェルトは「ホモセクシュアル」を「第三の性」（本質主義化）と規定していたが、同時に「Sexuelle Zwischenstufen」（グラデーション）と捉えた面もあった。戦間期ベルリンはこうした性の多様性が織り成すモダンとポストモダンの交錯する場であり、そこに労働者たちの＜共＞とクィアを繋ぐネットワークが形作られていた。

（２）クィア史の課題と目的

そもそもクィア概念は LGBT（モダン）的な観点ではなく、ポストモダン的な視点を有している。すなわち、LGBT は差別を自覚化し、解放運動によりヘテロセクシュアルと同権要求を行うのに対して、クィアはそうした社会的に生み出される要求・状況・構造に関心を向ける。別の言葉で言えば、LGBT が主体を本質化するのに対して、クィアは主体を作り出す「構造」を問題化する。ただし、性的マイノリティが学校・職場・地域・国家から排除されている現状を鑑みれば、戦略的本質主義を採用し、「わたし」の問題として語るところから始めざるを得ない。クィア史の解放戦略は社会的な区別・区分の境を無化し、溶解することを目的としているため、本質主義はいずれ解体されることになる。そのため、クィア史は LGBT を外化するのではなく、内化する思考を打ち出した。つまり、LGBT が「いる」のではなく、自分のなかにもクィアは「ある」という視点である。こうした点を踏まえれば、クィア史はヘテロセクシュアルな国家・社会像を自明視せず、人間の欲求や感情といった曖昧さを含んだものとして捉え直すことが可能となる。こうしたモダンとポストモダンの複雑な力学を解明するため、本研究ではクィアの黎明期であるヒルシュフェルトを考察の軸に据えた。また、クィア史を女性史・ジェンダー史・男性史の蓄積と参照させつつ、史学史的な検証も行った。

３．研究の方法

本研究は、（１）基本資料の収集、（２）国内アドヴァイザーとの交流、（３）海外における資料収集とネットワーク構築、（４）適宜発信の 4 本柱として作業を進めた。

（１）基本資料の収集
基本文献はヒルシュフェルト、性科学研究所、戦間期ベルリン都市史などのキーワードに関する必要な研究書を揃えた。また、国内外の基本文献を体系的かつ歴史学・社会学など幅広い分野にわたり横断的に収集することに努めた。
（２）国内アドヴァイザーとの交流
理論・方法面では歴史学研究会近代史部会メンバーとの交流・議論を深め、2014 年度歴史学研究会大会近代史部会「『寛容』と嫌悪を問い直すためのクィア史」に結実した。星乃はコメンテーターとして参加し、若手研究者の発表によって、クィア史の新たな知見を獲得した。その際、同部会メンバーであった酒井晃氏と知り合い、彼の協力のもとに後述する公開シンポジウム「近代社会とセクシュアリティ―ドイツ・日本・アメリカの比較クィア史―」を企画した。また、2014 年度ジェンダー史学会大会「原発とジェンダーの現代史」において、ジェンダー史と＜共＞の関係性を発表し、新たな知見とネットワークを構築した。また、GID（性同一性障害）学会やクィア学会など関連学会へ積極的に参加し、知見を得るよう努めた。
（３）海外における資料収集とネットワーク構築
ヒルシュフェルトの Sappho und Sokrates,Leipzig,1896 をはじめ、彼自身の著作を収集し、合わせて性科学研究所の機関誌 Sexualwissenschaft やその他クィア関係の基本文献について、ドイツ・ベルリンを中心に集めた。また、マグヌス・ヒルシュフェルト協会会長であるラルフー・ドーゼ氏から様々な知識の提供を受け、ドイツのクィア研究者との交流も深めた。
（４）適宜発信
研究成果の発信として歴史学研究会、ジェンダー史学会等で成果を公表し、2016 年 12 月 3 日に公開シンポジウムを主催した。

４．研究成果
以下、年度ごとに区切って、そこで得られた成果について詳述する。
（１）2014 年度
初年度である 2014 年度は、準備段階という位置付けのもと、①基本資料の収集、②国内アドヴァイザーとの交流を行った。①については、ヒルシュフェルト、性科学研究所、戦間期ベルリン都市史に関する基本文献の収集にあたった。②については、歴史学研究会大会近代史部会「『寛容』と嫌悪を問い直すためのクィア史」（2014 年 5 月 25 日）で若手研究者のクィア史研究に触れた。同大会はクィア史を女性史・ジェンダー史・男性史の成果を摂取し、ヘテロセクシュアリティの社会関係を前提とせず、様々な領域からクィアに読み解く視座を打ち出した。とりわけ重要なことは、差別を迫害・排除だけでなく、ヘテロセクシュアルによって解釈された性的マイノリティが、認知されるプロセス＝「寛容」を議論の遡上にのせた点にある。星乃はコメンテーターとして登壇し、本質主義的な解放運動の陥穽を指摘し、合わせてクィア史の意義について 3 点論じた。すなわち、①グラデーションによる性愛、②差別をつくり出す社会の問題、③性を介在させた人間関係の分析の可能性についてである。同大会への参加は、若手研究者がクィア史を自らの問題として研究していること、隣接領域の論点を積極的に摂取しており、裾野の広がりを知ることができた。また、ジェンダー史学会大会「原発とジェンダーの現代史」（同年 12 月 14 日）では、討論者として加わり、現代史研究における国家・社会の犠牲や差別のシステムと＜共＞の可能性について論じた。
これらの研究を通じて、クィア史の導入することの意義がより明確となった。それは、複雑な人間の感情や欲望、あるいはそこで形成される社会関係をクィアに読み込むことで、新たな歴史解釈の可能性を示した。また、現代史研究と＜共＞・クィアの関係性を幅広い視野のもとに獲得することができた。

（２）2015 年度
2015 年度は、①基本資料の収集、②国内アドヴァイザーとの交流、③海外におけるネットワーク構築などを推進した。③の海外におけるネットワークはドイツ（ベルリン）での資料収集を数回行い、ドイツのクィア研究者との意見交換を行った。
また、本年度は二つのシンポジウムに触発された。一つ目はジェンダー史大会シンポジウム「『制度』のなかの LGBT―教育・結婚・軍隊―」（2015 年 12 月 13 日）で、制度と LGBT がどのような関係にあるのか、教育・結婚・軍隊を事例に明らかにした企画であった。そこでは LGBT の包摂と排除が、異性愛規範を前提とするナショナリズムや軍事主義と密接に関わる点に大きな示唆を得た。二つ目は立命館大学で開催された「戦争と性暴力の比較史へ向けて―強姦、売買春から恋愛まで―」（2016 年 3 月 12 日）で、性暴力に潜む自発性から強制までの連続性についての、比較史的な観点を得ることができた。両シンポジウムへ参加したことにより、次年度開催したシンポジウム構成を考える際の参考となった。
情報発信については、「『学生報告』という実験―福岡大学人文学部歴史学科西洋史学生有志の 10 年―」『歴史評論』（2015 年 5 月）を発表し、福岡大学という場から「学生報告」をつくり出し、学生たちとの＜共＞の歴史像を試みた 10 年間を論じた。
以上の研究活動をもとに、性的カテゴリーが自明ではないこと、そしてセクシュアリティ区分そのものが曖昧であることが浮き彫りとなり、加えて、ナショナリズムや軍事主義などの社会規範、社会制度とセクシュアリティの実践がどのように結びつくのかが論

点となった。こうした点を解明するため、最終年度は近代社会における性の多様性と規範性を総体的に捉えるためのシンポジウムを企画した。

（３）2016 年度

最終年度にあたる 2016 年度は、基本資料の収集・整理、国内外アドヴァイザーとの交流、適宜発信を進めると同時に、総合的なまとめの作業を開始させた。資料収集・整理については、これまで蓄積してきたヒルシュフェルトなど関連文献の翻訳作業を進めてきた。国内外アドヴァイザーとの交流については、社会学、人類学など隣接学問の専門家との交流を図るため、領域横断的な分野での研究会に参加した。また、『史学雑誌』の「回顧と展望」（2016 年 5 月）を執筆する機会を得て、2015 年度のドイツ・スイス・ネーデルラントにおける現代史研究の動向を整理した。

こうした様々な知見を得るなかで、本研究の位置を総体的に把握するため、同年 12 月 3 日に明治大学において公開シンポジウム「近代社会とセクシュアリティ―ドイツ・日本・アメリカの比較クィア史―」を開催した。シンポジウムでは、主に若手研究者に報告・コメンテーター（石井香江氏、酒井晃氏、箕輪理美氏、松原宏之氏）を依頼し、クィア史の到達点と論点整理を図った。その目的は、近代社会を性的アイデンティティのカテゴリー構築として捉えるのではなく、多様な実践と社会規範の相互作用として、近代史の再考を意図した。討論では、セクシュアリティが社会にとってどのような意味付けがなされていたのか、グラデーションと異性愛規範との関係性、あるいは国家・市民・家族など社会構造との関連でクィア史を読み解くことの重要性などの論点が出され、クィア史が女性史・ジェンダー史・男性史とは異なる視角から歴史を語り直す可能性を示した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

①星乃治彦「2015 年の歴史学界 回顧と展望―現代：ドイツ・スイス・ネーデルラント―」『史学雑誌』査読有、125 編 5 号、2016、378-384 （今井宏昌氏との共著）

②星乃治彦「『学生報告』という実験―福岡大学人文学部歴史学科西洋史学生有志の 10 年―」『歴史評論』査読有、781 号、2015、35-43

③星乃治彦「同性婚時代のクィア史」『歴史学研究』査読有、924 号、2014、108-110

④星乃治彦「ポスト資本主義左翼=ドイツ左翼党の軌跡と課題」『季論 21』査読有、26 号、2014、124-133

〔学会発表〕（計 4 件）

①星乃治彦、趣旨説明、公開シンポジウム「近代社会とセクシュアリティ―ドイツ・日本・アメリカの比較クィア史―」、2016 年 12 月 3 日、明治大学（東京都）

②星乃治彦、コメント、2014 年度ジェンダー史学会大会シンポジウム「原発とジェンダーの現代史」、ジェンダー史学会、2014 年 12 月 14 日、横浜国立大学(神奈川県)

③星乃治彦、コメント、2014 年度歴史学研究会大会近代史部会「『寛容』と嫌悪を問い直すためのクィア史」、2014 年 5 月 25 日、駒澤大学（東京都）

④星乃治彦、台頭するドイツ左翼に学ぶ、革新は生き残れるか Part 5、2014 年 4 月 12 日、下京いきいき市民活動センター（京都府）

〔図書〕（計 1 件）

①星乃治彦、かもがわ出版、『台頭するドイツ左翼―共同と自己変革の力で―』、2014、272

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

星乃治彦（HOSHINO, Haruhiko）
福岡大学・人文学部・教授
研究者番号：00219172

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者

(　　)